

憑依靈の種々相

其頃小山某なる三十歳位の青年があつた。此男も靈媒として優秀なる資格者であつた。此男は大酒呑みで酔ふと精神喪失者同様、物の見境ひもなく、一文の金も持たずして近所の酒屋を一軒々々飲み廻るのであるが、その尻拭ひを親父がいつも、させられるといふ訳で、その悪癖を治して貰ひたいと頼みに來たのが動機であつたが、面白い事にはその男に種々の憑靈現象が起り、私に価値ある靈的資料を提供して呉れたのである。その中の興味あるものを選んでかいてみる。

或日憑依した靈は数ヶ月前死亡した近所の酒屋の親父で、非常に角力が好きであつたとみえ、憑依するや肘を張り、四股を踏み、「サア、どいつでも掛つて來い。俺に敵ふものはあるまい」といつて威張るのである。私の家の書生は癪に觸つて打つかつてゆくと思ひに投飛ばされて肱の関節を折られ治療に一年以上かかったのである。或時は屈強の男が三人掛りでやっと抑えつけた事もあつた。

又或日の事である。老人の如き靈が憑依したので、聞いた所、「俺は此肉体の伯父に当る者で、埼玉県の百姓であるが、俺は酒が好きで堪らないから此肉体に憑いて酒を飲むんだ。」といひ酒を要求するのである。私は、「酒を飲ませるから此肉体を出るか?」と言ふと「チャア、成丈大きいので一杯吞まして呉れる、そうすればすぐ出る。」と言ふので、其通りしてやった所彼は、「もう一杯。」といふ。又その通りしてやると「又一杯。」と言ひ、都合三杯飲んで肉体を去つたのである。此靈が最初憑つた時部屋中を見廻し、怪訝な顔をしてゐた。私は質ねた処、彼は、「此処はどこだんべ。」と言ふ。私は、「東京の大森といふ処の私の住宅である。」と言つた処、「俺が居る彼世とは余程異ふなア。」と言ひ、「煙草が勤喫みたい。」といふので巻煙草を与ると、「こんな煙草はいけねえ。煙草で吸ひてい。」といふのでその通りしてやると、彼はヤオウ腰を上げたが、その姿は老人其ままである。やがて縁側へ出て庭を見廻し乍ら、うまそうに煙草を喫んでゐる。私は聞いた。『彼世には煙

草はありますか?』と言ふと、「煙草もねへし、錢もねエので喫む訳に行かねへから、人間の身体に入エって喫むんだよ。」といふ。

『成程――』と私は思った。

右の老人が出ると入れ替つて又何かが憑依したらしく頗る慎ましかたな態度である。聞いた処「妾は近くの煙草屋の娘で〇〇といふ。今から二月ばかり前に死んだのですが、竹ちゃんが好きだったので（此男の名は竹ちゃんといふ）今晚来たのです。」といふので、「何か用がありますか?」と訊くと、「喉が涸いて堪らないから水を一杯頂戴したい。」といふので私は、「未だ新仏である貴女は毎日水を上げてもらうんでしょう。」といふと「ハイ、上げてはもらひますが呑めないのです。」といふので私は不思議に思ひ、再び訊ねた処、彼女曰く「水を上げる人が私に吞ませたい氣持などはなく、ただ仕方なしお役で上げるのでさういふ想念で上げたものは呑めないのです。」との事で、「成程靈界は想念の世界」といふ事が判った。故に仏壇へ飲食を上げる場合、女中などにやらしたり、自

分であつてもお義理的に上げるのでは、何にもならない事が判つた。彼女の霊に水を吞ませると、うまそうに都合三杯のんだのである。